

「思い」を受け止め「心」をつなぐ

兵庫県 西宮市立大社中学校 3年
投石 萌（なげいし めぐむ）

東北の海は藍色に澄んでいた。生活の全てを飲み込んでしまった津波がこんなきれいな海からやってきたことなど信じられないくらい穏やかだった。でも、海から陸に目を移すと、そこには本当に何もなかった。所々に片付けられ、集められた瓦礫の山があるだけ。何もない土地が広がり雑草だけが伸びていた。町全体が荒れ地だった。テレビで見たり、聞いたりしていたはずなのに、丘から見る風景は、言葉にならないほどの衝撃だった。

この夏、私は東北に行った。復興に二十年以上必要とされる被災地の仮設住宅を訪問し、被災者の方と交流するボランティアグループの活動に一人で参加するためだ。私たちは報道もなく支援が届きにくい三陸海岸沿いに点在する小さい仮設住宅地を中心に回った。

東日本大震災のことはそれなりに知っているつもりだった。地震だけでなくその後の津波や放射能の被害の大きさはテレビや新聞でもたびたび報道されているし、私自身も救援募金をした。瓦礫の片付けや作業をするために多くのボランティアが東北に行っていることも知っていた。でも、今回の訪問の目的は「心の支援」だ。行く前に訪問時に渡すメッセージカードと手作りの品を準備した。私はフェルトでハートを作った。中に綿を入れたので針山にも使える。決してきれいにできたわけではないが、夏休みに入ってから作った六十五個。帰省した時には田舎の祖母も手伝ってくれた。たった一人で参加する勇気をほめてくれた後「おばあちゃんの分も行ってきてな。」この一言がうれしかった。「その気持ちをちゃんと東北に届けるよ。」と思った。

困ったのはメッセージだ。どう書いたらいいのか。何と言えればいいのか。すごく悩んだ。本当に心の支援なんて私にできるだろうか。ちょっと不安なまま被災地に行った。

鉄骨だけ残った防災センター、奇跡の一本松、そして内陸まで打ち上げられた巨大漁船。すさまじかった津波の破壊力にあ然とした。

たくさんの遺留品は無言のままで私たちに語りかける。明日がくるのがあたり前だったあの日。もう会えない人がいるなんて誰も思っていなかった。朝出かける時に言えなかった「ありがとう」や「ごめんなさい」たくさんの思いが残っているような気がした。

阪神・淡路大震災では、家は建っていた場所で壊れた。でも、津波被害のあっ

た地域では家が建っていた場所には何も残っていない。予想もできない所まで流されてしまったそうだ。だから命は助かった人も思い出の品すら返ってこない場合も多い。娘の幼い頃の写真が一枚もなくなってしまったというおばあさんの話を私は黙って聞くことしかできなかった。

仮設住宅を二十ヶ所以上訪問した。国道沿いの山際や空き地にぽつんと五軒、十軒と建っている仮設住宅は生活するのが本当に大変だ。近くには買い物する店も病院もない。車がなければどうしようもない。生活はあたり前に大変だと思うが、訪問して話したお年寄りたちはたくましかった。それでも「田畑が全部流されて農業がもうできない。本当に何も無いから暇で暇で仕方がない。」と帰れない家や田畑を思って寂しそうだ。「親友を津波で亡くした。」「あんな津波が来たら、年寄りは逃げられない。」「お金がある人は仮設を出ていく。軒数が減ったら、どうなるか心配だ。」など、あの日の地震や津波のこと、仮設住宅での暮らしやこれからの不安などについて色々語って下さる方に出会った。ラジオ体操を一緒にした。小さい子と遊んだ。行く先々でジュースやお菓子で歓迎されたり、帰りには手作りの品を手渡されることもあった。私が持っていったハートも喜んでもらえた。

今思えば、心の支援ができるかなとか思っていた自分がちょっと恥ずかしい。何て言えばいいのかなとか、どんな言葉をかけたらいいかとか、そんなことを考えることがそもそもおかしい。「こんにちは。西宮から来ました。」たったその一言から交流が始まるのがわかり、中学生の私たちがだんだん積極的に動けるようになった。何も言えなくても、聞いてうなずくだけでも構わない。何かが心に触れる。限られた時間であっても別れる時にお互いにちょっと温かい気持ちになる。結局それでいいのかなって今なら素直に思える。

東北に行ってよかった。実際に自分の目で見たこと、知ったこと、聞いたこと、そして考えたこと。ありのままを誰かに伝えたい。ボランティアとは何か。何をすればいいのか。そして自分には何ができるのか。まだはっきりと言えない。でも、自然体で人と出会うこと。続けて関わっていくこと。それで見えてくるものがきっとある。私の力なんて本当に小さいけれど、たくさんの人の思いを受け止めることが人と「つながる」第一歩になると思う。東北の海や空ははるか西宮まで続いている。また来年もあの海を見に行きたい。